



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	円地文子研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	齊田, 春菜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16560号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95690
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Haruna_Saida_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 齊 田 春 菜

学位論文題名

円 地 文 子 研 究

・本論文の観点と方法

円地文子は昭和期を通じて多数の作品を発表した著名な女性作家であり、『源氏物語』を全訳するなど日本の古典文学に造詣が深い作家としても知られる。近年は、フェミニズムやジェンダー批評の観点からの再評価が活発に行われている。本論文は円地の作品を「少女小説」（第一部）、「女性表象と語り／翻訳」（第二部）、「老女もの」（第三部）の三つの作品群に分類し、各々の作品群の中からいくつかの作品を選んで、〈語りなおし〉の手法と女性イメージに着目して考察を行った。円地の作品には、古典的な文学作品・芸術作品、作中人物が執筆／制作した小説・論文・絵画などの作品、新聞記事などの諸テキストが取り上げられて、それらのテキストに新たな解釈が加えられ、テキストが変形されながら、主たる物語が展開されるものが少なくない。本論文では、円地作品において〈語りなおし〉の手法が様々なヴァリエーションを伴いながら幅広く用いられていることを確認すると共に、各作品に即して、この手法の機能や効果について考察した。一方で、少女小説に描かれる少女、古典文学作品にインスピレーションを受けた作品に描かれる巫女的な女性、「老女もの」に描かれる老女と少女を中心に、女性イメージについてジェンダーの観点をふまえて究明する。また、第一部で取り上げられる少女小説については、先行研究が手薄であることをふまえて、基礎資料の整理・作成も行った。

・本論文の内容

本論文は、序章・終章のほか、全三部八章、付録一～三より成る。

序章「円地文子研究の現在と本論文の問題設定」では、先行研究の整理を行い、本論文の目的と方法・構成と概要を提示する。

第一部「少女小説」研究」では、円地の少女小説作品について論じる。第一章「円地文子の少女小説の基礎的研究——戦後から一九五〇年代の少女小説研究との関係も踏まえて」では、円地文子による少女小説執筆活動について概観し、主な少女小説作品の概要を提示した上で、同時代における円地の少女小説の位置づけについて問題提起を行った。第二章「「富士のある窓」・「麗わしき母」論——未完の少女小説の語りなおしによる少女小説の枠組みの獲得」では、「富士のある窓」と「麗わしき母」を比較し、後者が「母子ものの少女小説」の枠組みを用いて前者を改稿した作品であることを明らかにする。第三章「「秋夕夢」における少女小説の枠組みと逸脱——初出と初刊の比較を軸に」では、「秋夕夢」の初出と初刊を比較し、後者が「少女の成長物語」という枠組みから逸脱した作品であることを指摘する。第四章「「あほうどり」における少女小説の枠組みと逸脱——「信天翁」との比較を軸に」では、共通する挿話を用いた「あほうどり」と「信天翁」を比較し、「あほうどり」を「母子ものの少女小説」の枠組みと関係づけて考察すると共に、二つの作品における挿話の語り方の差異を浮かび上がらせる。第五章「『少女サロン』における円地文子」では、少女雑誌『少女サロン』（偕成社刊）における円地の執筆活動を概観した。

第二部「女性表象と語り／翻訳」では、女性が書くことを主題とした日本の古典文学と関連の深い作品について論じる。第六章「「妖」論——女性と物語（Ⅰ）」では、「妖」について、『伊勢物語』などの日本の古典文学の翻訳を行う千賀子が、物語の創造を通じて老／若を越境し、セクシュアリティを構築するプロセスについて考察した。第七章「「二世の縁 拾遺」論——女性と物語（Ⅱ）」では、「二世の縁 拾遺」について、作中に挿入される上田秋成「二世の縁」口語訳に見られる入定

の定助の「性への執着」が他者によって構築されたイメージであるとする解釈を提示し、この点をふまえて、終盤の場面における「私」のセクシュアリティの発露を、現実と物語の越境の観点から解釈する。第八章『女面』論——女性たちの「企み」の物語」では、父系血統を排除することで亡き夫に対する復讐を企てる三重子の「巫女」としてのイメージが、三重子が執筆した「野々宮記」を媒介としつつ、登場人物の共犯関係によって構築されていることを明らかにする。第九章『なまみこ物語』論——女性の語の二重性をめぐって」では、語り手の「私」が、「生神子物語」をめぐり記憶に基づきながら「私の「なまみこ物語」」を紡いでいく物語の枠組みをふまえつつ、定子の生霊騒動が人物くれはの演技によるものか否かを読者の解釈に委ねる語りについて考察した。第一〇章「「遊魂」・「交配花」試論——『源氏物語』現代語訳との関係から」では、円地が『源氏物語』の現代語訳を行っている時期に執筆された「遊魂」と「交配花」について、『源氏物語』の〈語りなおし〉という観点から考察した。

第三部「「老女もの」研究」は、「老女もの」に頻出する少女のモチーフに注目しつつ、「老女もの」について論じる。第一章「「蛇の声」論——老女と少女たち」では、「蛇の声」について、老女作家である志賀が新聞記事からインスピレーションを得て創造する物語が「声のないものに声」を与える営みであることを指摘した。他方で、作中で言及される藤田嗣治の版画による少女像と志賀の若返りのイメージから、本作品を少女と老女の流動的な関係を提起した作品として位置づける。第二章「「猫の草子」論——老女と少女、そして動物」では、「猫の草子」について、老女作家の「私」が、画帳「猫の草子」を手がかりとして、自殺した老女画家の木原志乃について〈語りなおし〉を行う物語として位置づける。同時に、「私」と孫との猫を介したコミュニケーションに老女と少女の親和性が見られることを指摘する。第三章『彩霧』論——老女と巫女、そして少女」では、『彩霧』について、川原悠紀子から紗乃に手渡される「賀茂斎院絵詞」にまつわる斎院のイメージが多く的人物に共有されるプロセスをたどる。一方で、斎院のイメージを担う少女の明美が果たす役割に注目し、老女と少女の密接な結びつきについて考察した。

結論においては、各部・各章の成果をまとめつつ、本論文が取り上げる多くの作品に、〈語りなおし〉の手法が見られることを指摘する。また、円地の作品に描かれる少女像・巫女像・老女像などの女性イメージの間に関連性があることを確認する。最後に、本論文の到達点をふまえつつ、今後の課題を提示した。

付録一～三は、第一部に関連する資料である。付録一「円地文子の少女小説目録」は円地文子の少女小説の目録である。付録二『日本少女』（小学館）総目次と解説」は「富士のある窓」が連載された月刊雑誌『日本少女』の総目次と解説である。付録三「円地文子『少女サロン』（偕成社）連載三作における主な読者からの反応——「荒野の虹」、「あの星この花」、「白百合の塔」では、『少女サロン』に連載された三編の小説に対する読者の反応をまとめた。